エッセイ

いのちとこころ——物語と否定性

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）
Toshio KAWAI

昨秋に島根大学で開催された箱庭療法学会の「物語と鎮魂」と題する大会シンポジウムで、東北学に長くかかわり、東日本大震災後の支援活動に尽力してきた赤坂憲雄氏は、次のような話を紹介した。

友だちのジャーナリストが震災後に車で道路を走っていて、人をはねたような衝撃を感じた。ところが車を降りて確かめてみても、どこにも人影は見当たらない。それでも気持ちが悪いので警察に届けに行くと、「またあの場所ですか」ということであった。つまり人をはねたように思っても、人影が見当たらないという届け出が、その場所から何件も届いているのだそうだ。友人は、震災で亡くなってさまよっている人をはねたのであろうか。

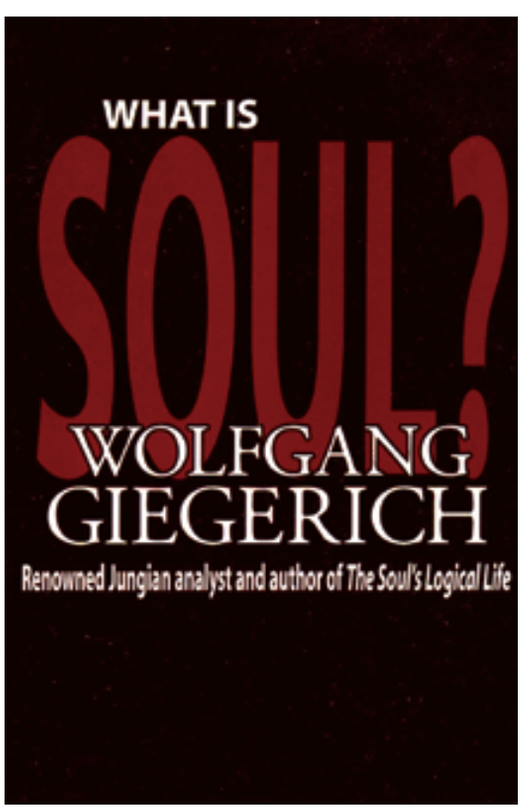
この逸話は、いのちとこころについて示唆するところが多い。まず、見つからなかった人影のように、いのちや魂は実体として捉えることができない。ユング心理学のラディカルな理論家であるヴォルフガング・ギーゲリッヒ（Wolfgang Giegerich）は、昨年出版された*What is soul?*の中で、魂を否定の否定として記述している。つまり死者の魂という表象があるように、いのちの否定としての死体を、さらに否定したときに魂という考えが生まれるというのである。

第2に、いのちや魂について、日常から考えるのはむずかしいことが示されているのではなかろうか。いのちの尊さを説いたりして、平和なときにいのちについて論じても、空理空論になりがちである。心理療法に基づく臨床心理学は、人のこころについて、危機にあるときなど極端な状態から考えていく学問であるけれども、その方法論には一理あって、いのちや魂は、愛する人が亡くなったり、今回のように震災が起こったりなど、極限の状況ではじめて問題にすることができるのではなかろうか。

さらに第3に、冒頭に紹介したように、極限状態でこころはいのちについての「物語」を生む。『ユング自伝』において、「死後の生命」という章が設けられているけれども、そこでユングは、理論的に論じようとはしない。そこではmytho-legein, Geschichte erzählenつまり物語を語るしかできないというのである。ユングは、人が亡くなったときなどの自分が経験した不思議な逸話をいくつも物語っていく。

その中の1つに、母親が亡くなったときにユングが経験したことが挙げられている。知らせを聞いて、帰省する車中のユングはたまらなく悲しかったけれども、同時に楽しげな音楽が聞こえてきて、多くの人々がパーティーをしているかのようであったという。そしてこの体験からユングは、死というのは終わりではなくて、それは多くの死者たちと一緒になる、祝福すべき出来事で、魂としての存在は続いていくのだと結論づける。まさに津波で亡くなった人々の魂が、さまよっているようなものなのである。

もっともこのような体験が、魂の存在について何の証明にもならないことには注意を要する。先述の本でギーゲリッヒは、母親が亡くなったときのユングの体験が、決してナイーブで自然なものでないことを指摘する。つまりユングは、18世紀までは、ヨーロッパでも墓場で楽しいパーティーを持つ習慣があったことを知っていたはずで、その知識を元にヴィジョンの体験を持っていたのではないかと指摘する。先の震災後の幽霊の物語においても、無念に亡くなった人の魂が成仏せずに彷徨（さまよ）うというわれわれの持っている考えの影響を考慮する必要がある。このように、いのちや魂については、常に物語を作っていくことと、それを冷静に見抜いていくことが必要なのであろう。



ヴォルフガング・ギーゲリッヒの*What is soul*？